

国語科部会

1 学校研究課題を受けた教科のテーマ

学校研究課題「『生徒の学びをすすめる教育活動の推進』～見える化・発信を意識した取組2～」を受け、国語科では「『学習のねらいと見通し』と『振り返りとまとめ』を明確に」とし、取り組んだ。学習活動の見える化を図るための方策として、まず、授業の初めに「本時の目標」を板書することで、見通しをもって学習に進めると考える。また、生徒の考えをワークシートに記入させた上で発言させ、それを板書することで生徒の理解が深まると思われる。そのためにも、工夫された板書計画が必要で、授業の終わりに1時間の授業内容がわかるようにしたい。授業の終末では、何がわかったのか、わからなかったのかを明確にすることで、次へと繋げられると考えた。

2 具体的な取組

(1) 授業の目標・流れの提示

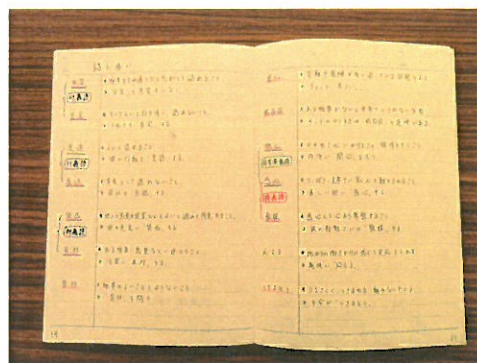
毎時間、授業の目標を板書し、授業の流れや内容を理解させてから授業に取り組んでいる。目標は、学習活動だけの提示ではなく、目的と手立てを入れるように心がけている。そのことにより、生徒は見通しをもった取組をすることができる。

(2) 漢字小テストの実施

1か月ごとに漢字小テスト予定を背面黒板に掲示し、家庭学習での取組を促している。「漢字の学習」(明治図書)を活用し、2ページごとに2回の漢字テストを行い、月に6～8回実施している。テストのやり方は、聞き取ったものを用紙に書くという方式で、集中して聞く力を身に付けさせるという意図がある。採点は、すぐに座席の隣同士で交換し、採点をさせる。10点満点の8点以上を合格とし、2回目で合格できなかった生徒に対しては、放課後の時間などを使って補習を行っている。

(3) 語句ノートを取組

教科書に出てくる語句を中心に、また、読書の本の中から、新聞やニュースなどから気になった語句など、調べる語句は何でもよいとし、毎月、ノート提出をさせている。ノートは、B6サイズの小さいノートを使わせている。ノートを点検すると、その語句を使った文が書かれていたり、類義語・対義語など関連語句への広がりがみられるノートもある。



(4) 古典作品の暗唱

中学校の古典学習での大きな目標は、古文や漢文に読み慣れ、古典作品に親しむことである。繰り返し、音読することで、歴史的仮名遣いや独特の言い回しにも慣れ、古典作品のよさにも気付くはずである。また、1年、2年生は、冬休みの課題として、百人一首の暗記にも取り組みませ、3学期に、百人一首大会を実施している。

(5) 定期テストの「聞き取り問題」

定期テスト問題の中に、放送を聞き取る問題を取り入れている。集中して聞く力を高めることと、聞きながらメモをとる習慣をつけるという目的である。1年生では、必要のない言葉をメモしてしまったりしているが、2年、3年と慣れてくると、箇条書きや矢印で繋いだり、と要領がよくなっていく。

(6) 全国・県学力状況調査の活用

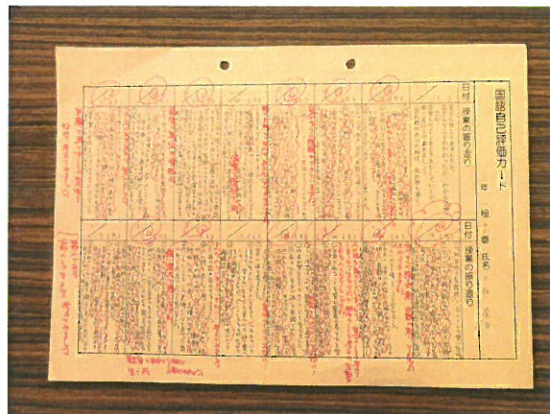
朝学習として、1週間(5日間)問題に取り組んだ。その中で、いくつかの課題が明確になった。まず、問いをしっかりと読み取れていないということだ。二つの記号を答えなければならない問いに対して一つしか書かれていない生徒が多かった。また、書く問題に対して、全く書いていない生徒、書く条件があるにも関わらず、その条件を満たしていない生徒、などである。まず、正確に読む力が要求される。

(7) 家庭学習の取組

家庭学習については、漢字小テストの学習、語句ノートの取組以外に、ワーク学習に取り組ませて、定期テスト前に、ワークを提出させている。

(8) 自己評価カードの活用

毎時間、授業の終わりに「自己評価カード」の記入をさせている。個による学びの振り返りと考え、単なる感想だけではなく、本時の学びについて書かせている。記述については、3文で書くことを基本とし、①今日の授業で取り組んだこと、②授業でわかったこと・わからなかったこと、③これから生かしたいこと、などである。生徒にとっては、授業の振り返りができ、教師にとっても、生徒からの授業評価と捉え、授業後に回収し、コメント記入をしている。



3 成果と課題

(1) 成果

- ①「自己評価カード」は、生徒自身が自分の学習活動を振り返り、理解度を知ることによって役立っている。また、教師も一人ひとりの生徒の学習状況や理解度を把握することができ、教師自身も、授業の振り返りができた。
- ②「漢字小テスト」については、回を重ねることに定着し、漢字テストのある日は、休み時間から勉強に取り組んでいる生徒が多かった。

(2) 課題

- ①学習の遅れがある生徒に対して、フォローする時間がなかなかとれない。教科書の音読や漢字練習など取り組ませたい。個に応じた支援の充実が課題である。
- ②「語句ノート」の取組は、語彙力を豊かにしていると思われるが、それを活用させることが課題だと考える。

英語科部会

1 教科のテーマ「生徒達が目標を意識して取り組める指導と評価の工夫」

学校研究課題「生徒の学びをすすめる教育活動の推進～見える化・発信を意識した取組～2～」を受け、英語科では上記テーマを設定した。毎回の授業、あるいは学習するユニットごとに目標を示すことで、生徒達は「何を身につけたらよいか」を意識して学習に望めると考えた。また、筆記テストやパフォーマンステストを行う際に評価基準を示すことで、生徒達が何をどう練習したらよいかを明確にできると考えた。

2 具体的な取組

(1) 学習カードの活用

カードに毎時間、授業や家庭での取り組みについて記入させている。特に、教科書の音読に重点を置いているので、家庭での音読回数を記録させたり(2、3年)、正確に音読できるかを、友達同士で評価し合い、記録させる(1年)などした。また、学習の動機づけとして、カードを見て自分の理解度がわかるように工夫した。さらに、授業中の発言や、T-Fテスト、Q & Aなどの正解に対してポイントやシールを与えることで自分の頑張りを視覚化し、取り組みへの意欲を高めた。

(2) 授業の流れの提示(1年)

毎回授業の流れや目標を黒板に明示し、内容を理解させてから授業を行っている。生徒達は何を学び、どういうことができればよいのかを意識して授業に取り組んでいる。

(3) ペアワーク・グループワークの活用

基本文練習、短い会話練習等を授業の始めにペアで行わせている。また、教科書の音読等難しくないものはペアで、長い英文の読み取りやディベートなど、応用力が必要なものはグループで協力して行わせるようにした。人間関係を考慮し、相手を固定せず、次々と変えるような形で行う工夫もした。また、題材により音読練習も班単位で練習させ、班員がみんな読めるよう教え合うことを指示し、協力して発表させるなどした。ただし、指導時間を考慮し、グループワークを行う題材や場面は各学年で精選した。



(4) 小テスト・音読テストの実施

ユニットごとの単語テストでは、重要単語を提示し、その中から出題することで、苦手な生徒にも取り組みやすくした。また、毎学期音読テストを行い、毎日の学習の中で音読の大切さを理解させるようにした。音読テストでも明確に評価基準を示し、どう練習したらよいかをわかりやすくした。

(5) パフォーマンステストの導入

学習指導要領の改訂に伴う学習評価の観点の変更を受け、筆記テストの見直しと共に、各学年でパフォーマンステストを導入した。学習段階や学習内容を考慮し、口頭でコミュニケーション能力が評価できるよう、ALTと面接する形で行った。

(6) 家庭学習の指示

①教科書の音読

学習したページを10回を目安に、家庭で音読する用に指示し、音読回数を学習カードに記録させた。英語学習の最も基礎となる学習なので、授業でも重点的に行い、自分で練習できるよう指導した。学期に一度は音読テストを行い、定着度を確認した。

②単語・基本文練習、本文書き取り

単語は10回以上、基本文は3回以上ノートに練習し、本文を1回以上書き取ることを必須の課題とした。ノートは定期テスト後に点検し、評価にも入れた。特に、書くことは努力の差が生じる学習なので、授業中も机間指導しながら点検するようにした。

③プリント、ワークブックの問題練習

プリントの課題は特に基本の習得が必要な1年生に適宜与え、次時に点検と答えの確

認等を行った。ワークは各学年1冊ずつ購入し、定期テスト後に点検し、その取り組みを評価に入れた。

3 成果と課題

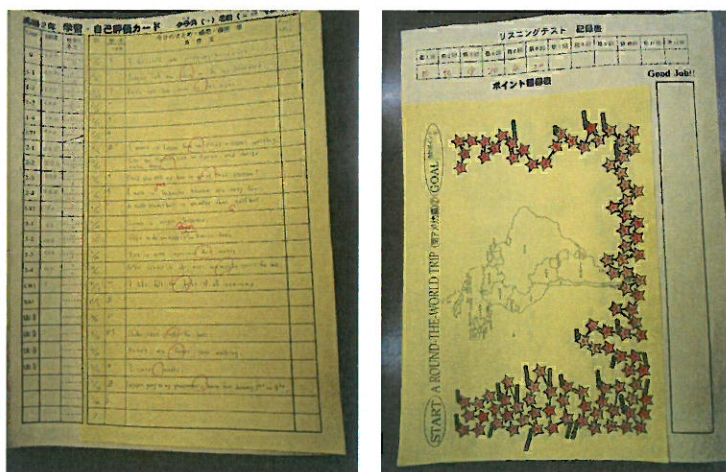
(1) 成果

- ①学習カードを3年間継続して書かせることで、生徒自身が自分の学習活動を振り返り理解度を知ることによって役立っている。また、教師も一人一人の学習状況や理解度を把握でき、予習や復習を行うよう声かけができた。また、学習カードのポイント制により、3学年を通して、発表・発言・授業への取り組みなどの意欲付けになっている生徒が多い。
- ②音読テストやパフォーマンステストを行うことで、書くことが苦手な生徒の学力も適切に評価することができ、学習意欲にもつながっている。また、事前にペアやグループで練習を行うことで自信を持って取り組めるようになっている。
- ③ペアやグループワークを行うことで、英語の苦手な生徒も友達から教えてもらったり、「迷惑をかけたくないので頑張ろう」という姿勢が見られた。英語の得意な生徒も活躍する場面が増えた。
- ④音読については、音読テストの結果及び授業での様子から、ほとんどの生徒がしっかりとできている。
- ⑤「読む」と「書く」の最低限の課題を提示することで、家庭学習の方向付けができ、何もしない、という生徒は少なくなっている。

(2) 課題

- ①学習の遅れている生徒を把握できても、それをフォローしてあげる時間がなかなか作れない。取り組む力のない生徒がいるので、サポート体制を考える必要がある。
- ②教科書の内容が大幅に増えたので、ペア活動やグループ活動については、どの場面で入れると効果的かを吟味し、しっかり計画しておく。また、生徒同士の人間関係等で実施が難しいこともあるので、その対策が必要になる。
- ③まだ、点検・評価されることが家庭学習の動機づけ担っている部分が多いと思われるので、自主的に取り組める意欲を作れるのが理想である。引き続き家庭学習にしっかり取り組ませることで、全体の底上げを図りたい。
- ④パフォーマンステストについては、内容や評価基準を常に見直していき、生徒達の学習意欲を喚起しながら適切な評価ができるようにしていきたい。

<2・3年学習カード>



<1年学習カード>



【理科部会】

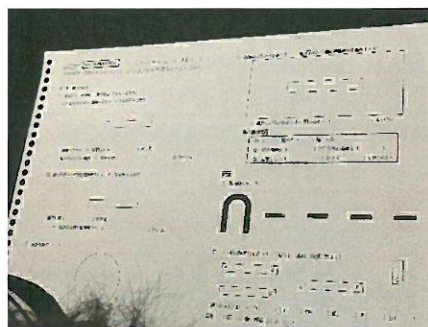
(1) 学校研究課題を受けた理科のテーマ

「見える化・発信を意識した学力向上に向けた取り組み」

(2) 具体的な取組

① 全授業プリント&リングファイル

理科では全学年で全ての授業をプリントで行っている。これにより、生徒によってノートのとりに方に差がなく、ナンバリングされているのでいつでも振り返りができる。また、プリントをリングファイルに綴じる形式なので、自己管理しやすくなっている。



授業プリント

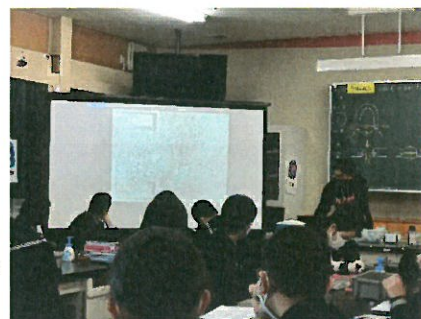
② 「課題に対する結論を表現しよう」に取り組む

理科の教科書では、各単元の各章に「課題に対する結論を表現しよう」という内容がある。学習した章ごとに、これまでに学んだ内容やキーワードをもとに生徒自身がまとめるというものである。各生徒が学習内容をどの程度理解できているかを可視化することで、その後の指導に活用している。

③ ICTを活用した授業

第1理科室、第2理科室のどちらにも大型スクリーンとプロジェクターを設置し、デジタル教科書やプリントの内容を提示しながら授業を行っている。

デジタル教科書は、教科書が拡大して提示できるだけでなく、写真や実験動画などを視聴できるので、学習内容の理解を深めることにつながっている。



大型スクリーン

④ ホワイトボードの活用

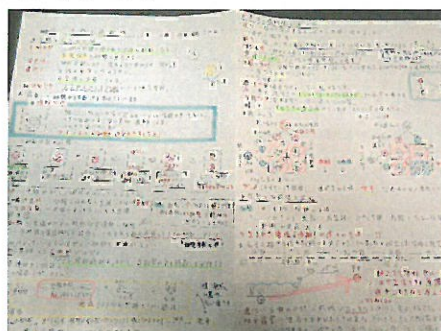
観察・実験の内容によっては、各班で考察を話し合い、ホワイトボードにまとめさせている。これにより、各班の考えを他の班に見せることができるだけでなく、ホワイトボードを保存しておき、次時の授業や他のクラスの授業でも活用することができる。

⑤ 良い例の掲示

理科では、単元ごとに「単元まとめ学習」を行っている。これは、各単元の学習終了後、教科書やプリントを使って、学習内容やポイントなどを1枚にまとめるというものである。生徒一人一人の表現力の向上が目的であるが、他の生徒の作品を見ることで、次の取り組みに生かせるようにしている。

また、定期テスト後には「理科テストやり直しプリント」に取り組ませている。

これは、定期テストのテスト返却後に、模範解答や教科書、プリント、ワークなどをもとに、テストの問題のやり直しをするというものである。この取り組みは特に1年生は生徒によって差があるので、良い内容ものを掲示し、取り組みやすいようにしている。



単元まとめ学習



理科テストやり直しプリント

⑥ 教材の展示コーナー

理科室は、授業を行う場所としての利用だけでなく、授業で扱った実物の教材を展示している。授業時間内では十分に紹介できないものでも、しばらくの間展示しておくことで、休み時間にいつでも誰でもふれることができる。



方位、星の動き、星座（3年地学）



火山噴出物、岩石標本（1年地学）

（3）成果と課題

① 成果

- ・プリントで授業を行うため、板書に時間がかからないので、授業が進めやすい。また、プリントには板書以外にメモをとるように指導をしているので、話を聴いてメモができる量が段々を増え、生徒によっては情報処理能力が向上している。
- ・デジタル教科書や教材の展示などにより、興味関心を持って授業に取り組める生徒が増えた。

② 課題

- ・プリントの書き方やメモのとり方、「課題に対する結論を表現しよう」への取り組みに差があるときに、授業内で時間をとって指導することが難しい部分があったので、なるべく差が生じないようにプリントの内容を工夫する必要がある。
- ・良い例の掲示をあまり行えなかった。意識づけのためには学期に一度は更新し、理科系の生徒に協力してもらうなど、生徒に呼びかける必要がある。

(1) 学校研究課題を受けた音楽科のテーマ

『基礎的な知識の定着を図り、生徒自身が知覚し感受したことを言葉にし、感想を書く力を育てる』

(2) 具体的な取組

①ワークシートの活用

ワークシートを使用し小学校で学習した内容まで遡り、生徒ひとりひとりの知識の開きをリセットすることで、全員が苦手意識を持つことなく取り組めるように工夫した。

②聴くときのポイントやヒントを提示する

感想が書けない生徒は、どの部分に注目して曲を聴けば良いかがわかっていない。そこを解決するために、聴くときのポイントや鑑賞感想文を書く上でのヒントをまとめたプリントを作成し、全員に配布した。

[illegible]

～ 聴くときのポイント～	
楽 曲	楽曲の題名 $\rightarrow$ 作曲者 $\rightarrow$ 演奏者 $\rightarrow$ 録音年 $\rightarrow$ 録音会社 楽 譜 $\rightarrow$ 楽譜の形式 $\rightarrow$ 楽譜の編成 $\rightarrow$ 楽譜の演奏者 楽 曲 家 名 $\rightarrow$ 作曲家 $\rightarrow$ 演奏者 $\rightarrow$ 録音年 $\rightarrow$ 録音会社 楽 曲 家 名 $\rightarrow$ 作曲家 $\rightarrow$ 演奏者 $\rightarrow$ 録音年 $\rightarrow$ 録音会社 楽 曲 家 名 $\rightarrow$ 作曲家 $\rightarrow$ 演奏者 $\rightarrow$ 録音年 $\rightarrow$ 録音会社
楽 曲	楽曲の題名 $\rightarrow$ 作曲者 $\rightarrow$ 演奏者 $\rightarrow$ 録音年 $\rightarrow$ 録音会社 楽 譜 $\rightarrow$ 楽譜の形式 $\rightarrow$ 楽譜の編成 $\rightarrow$ 楽譜の演奏者 楽 曲 家 名 $\rightarrow$ 作曲家 $\rightarrow$ 演奏者 $\rightarrow$ 録音年 $\rightarrow$ 録音会社 楽 曲 家 名 $\rightarrow$ 作曲家 $\rightarrow$ 演奏者 $\rightarrow$ 録音年 $\rightarrow$ 録音会社 楽 曲 家 名 $\rightarrow$ 作曲家 $\rightarrow$ 演奏者 $\rightarrow$ 録音年 $\rightarrow$ 録音会社
楽 曲	楽曲の題名 $\rightarrow$ 作曲者 $\rightarrow$ 演奏者 $\rightarrow$ 録音年 $\rightarrow$ 録音会社 楽 譜 $\rightarrow$ 楽譜の形式 $\rightarrow$ 楽譜の編成 $\rightarrow$ 楽譜の演奏者 楽 曲 家 名 $\rightarrow$ 作曲家 $\rightarrow$ 演奏者 $\rightarrow$ 録音年 $\rightarrow$ 録音会社 楽 曲 家 名 $\rightarrow$ 作曲家 $\rightarrow$ 演奏者 $\rightarrow$ 録音年 $\rightarrow$ 録音会社 楽 曲 家 名 $\rightarrow$ 作曲家 $\rightarrow$ 演奏者 $\rightarrow$ 録音年 $\rightarrow$ 録音会社
楽 曲	楽曲の題名 $\rightarrow$ 作曲者 $\rightarrow$ 演奏者 $\rightarrow$ 録音年 $\rightarrow$ 録音会社 楽 譜 $\rightarrow$ 楽譜の形式 $\rightarrow$ 楽譜の編成 $\rightarrow$ 楽譜の演奏者 楽 曲 家 名 $\rightarrow$ 作曲家 $\rightarrow$ 演奏者 $\rightarrow$ 録音年 $\rightarrow$ 録音会社 楽 曲 家 名 $\rightarrow$ 作曲家 $\rightarrow$ 演奏者 $\rightarrow$ 録音年 $\rightarrow$ 録音会社 楽 曲 家 名 $\rightarrow$ 作曲家 $\rightarrow$ 演奏者 $\rightarrow$ 録音年 $\rightarrow$ 録音会社

[illegible]

③グループワークの活用

書く力をつけるためには、まず自分の意見を持ち、それを相手に伝える力を持つことが必要となる。

学級全体で挙手し、発表できる生徒は限られているため、少人数でのグループワークで全員が発言する場を設けることにより、自分の意見を述べ、他人の意見をしっかりと聞く態度を養う。

④見える評価の工夫

積極的な拳手や発表を促すため、また生徒一人一人が達成感を味わえるように、見える評価として『拳手・発表カード』を配布した。視覚的にも楽しめるように、色を塗る図形の種類を増やすなど工夫をした。



(3) 成果と課題

1. 成果

- ①ワークシートを用いて記号や音符の読み書きが出来るようになってきた。
- ②聴くときのポイントやヒントを提示することで、自分の力で知覚・感受し、感想や意見を書くことが出来る生徒が増えた。
また、配布したプリントを見ながらより良い感想や意見を書こうと挑戦する生徒の姿も見受けられた。
- ③見える評価として配布した『挙手・発表カード』により、今まで挙手してこなかった生徒が積極的に授業に参加し始めた。
周りの生徒を巻き込み、「せーの」と声を合わせて一緒に挙手するなど、生徒同士の授業での関わりにも変化が見られた。

2. 課題

- ①記号や音符の読み書きが出来るようにはなってきたが、知識の定着までには至らなかった。次年度ではミニテストを行うなどして、より一層の定着を図りたい。
- ②ポイントやヒントを提示しても、文字を読むことが苦手であったり、まだ「知覚」すること自体が苦手な生徒も多くいるため、鑑賞中に「始まりの音はどうだったかな、大きめかな、小さめかな」「今この楽器が入ってきたよ」「音が大きくなったね」等、クラス全体に向けてなるべくわかりやすい言葉で提示をしていくことが、今後も引き続き必要である。
- ③挙手する生徒は増えてきたが、挙手がしたくても緊張してしまったり、自信がなくて出来ない生徒もいるため、そういった生徒にも目を向ける必要がある。
挙手が出来なくても自分の意見を発表したいと思っている生徒は少なくないので、良い意見や感想が書けていれば、こちらから指名して全体に向けて発表させ、その発表に対してきちんとその場で「いい所に気付いたね」など評価をし、自信をつけさせていきたい。

1 学校研究課題を受けた教科のテーマ

本校の研究主題「生徒の学びをすすめる教育活動の推進～見える化・発信を意識した取組2～」を受けて、社会科では「ICTの活用と生徒の表現方法の工夫」というテーマを設定した。ICTを効果的に活用したり、生徒の思考力や表現力を高める工夫をしたりすることが、生徒の学びをすすめることにつながると考え研究に取り組んだ。

2 具体的な取組

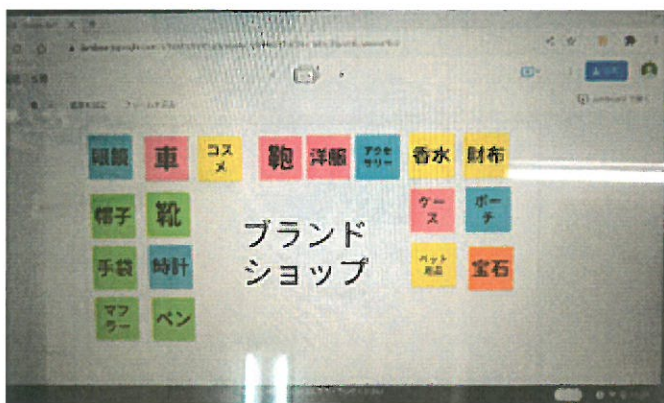
(1) デジタル教科書の活用

今年度、地理的分野・歴史的分野・公民的分野のデジタル教科書を全学年の授業で毎時間使用しながら授業をおこなった。活用する場面としては、絵や写真、グラフ、表、地図などの資料を提示するときや写真資料などに関する動画を視聴するとき、難解な用語について確認するときなどがあった。



(2) タブレットの活用

- ・朝日新聞の中高生新聞を読むときやNHK for Schoolの動画をみせるとき、何か調べたいことがあるときなどにタブレットを活用した。
- ・生徒の意見が見える化するために、google jamboardを活用した。店で売りたいものを生徒に意見を出させ、表示した。
- ・google classroomの課題を活用した。課題を班ごとに配布し、取り組ませた。



(3) 思考の見える化

資料の読み取りや読み取ったことを表現することに対する意識のアンケートをおこなったところ、資料（読み物、写真、地図、表、グラフなど）を用いた授業が「好き」や「どちらかといえば好き」と答えた生徒が多かった一方、資料を読み取ったことについ

て文章で表現することや言葉で説明することは「どちらかといえば苦手」や「苦手」と答えた生徒が多かった。このことから、授業の中で生徒が自身の考えや学習したことのまとめをノートに書く場面やそれを発表する場면을意図的に多く設定することで、文章で表現することや言葉で説明することに対する苦手意識がなくなっていくのではないかと考えた。また、書くことが思考の見える化につながり、発表することが発信する力を高めることにもなると考える。

(4) 分野別対策プリントの配布

- ・分野別の対策プリントを作成し、配布した。
- ・生徒が苦手な分野はgoogle formのアンケート機能を活用し、把握した。

(5) 小テストの実施

- ・分野ごとに小テストを行った。
- ・正答率が低かった問題は解説を行った。

3 成果と課題

(1) 成果

デジタル教科書やタブレットの活用により、生徒の視覚に訴える場面が多くなったことで理解しやすかったと思う。また、タブレットを活用することにより、生徒の意見を即時に反映することができたので、生徒の情報共有の手助けにすることができた。

思考の見える化については、最初の頃は自身の考えや学習したことのまとめをノートになかなか書けない生徒も多かったが、書く場面を多く設定したことで徐々に書ける生徒が増えてきたので、文章で表現する力がついてきたと感じている。

分野別対策プリントでは、生徒が自分の苦手な分野に重点的に取り組んでいた。

(2) 課題

タブレットのgoogle jamboardを使用して、生徒の意見が見える化したあとの生徒自身の考えを深める活動が不十分であった。そのため、意見交換後に課題に対する考察をおこなうなど自身の意見を深めることができる活動を組み入れたい。

また、ICT機器の準備が難しかった。初めて扱う機能や生徒のタブレット端末がエラーを起こした際の対処に時間がかかってしまった。そのため、繰り返し機器を扱い、対処法を確立することで課題に取り組ませる時間を確保したい。

自身の考えや学習したことのまとめをノートに書いたり発表する活動に関して、生徒の意識の中では、文章で表現することや言葉で説明することについて自信がない生徒がまだ多いので、もっと自信をもてるようにしていくことが課題である。

【数学部会】

1 教科のテーマ「ICTを用いた指導の工夫～基礎・基本の定着を目指して～」

学校研究課題「生徒の学びをすすめる教育活動の推進～見える化・発信を意識した取組2～」を受け、数学科ではタブレットの導入に伴い、上記テーマを設定した。紙面や教具だけでなく、タブレットを利用して映像を見せることはもちろん、自分たちで実際に式やグラフを動かすことで、その変化や特徴をとらえることができると考えた。

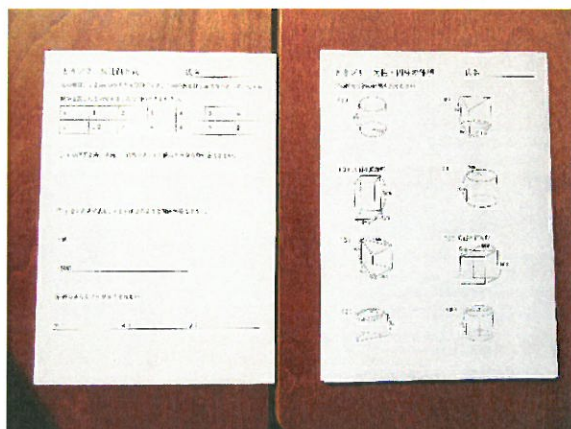
2 具体的な取組

①授業開始時の小テスト

- ・全学年で、小テストの実施を継続して行った。(内容は前時の学習内容)

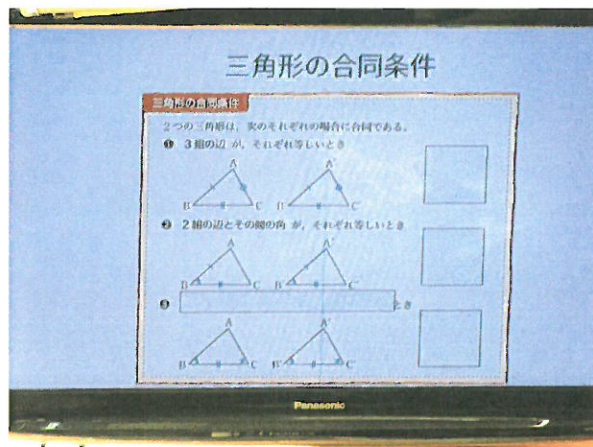
②ときプリ

- ・空き教室にプリントを用意し、計算問題や文章問題などの基本的な問題を各自で選んで取り組めるようにした。



③授業時のICTの活用

- ・教科書に載っているQRコードを読み取り、生徒に映像を見せた。
- ・タブレットを活用して、基本的な問題の復習ができるようにした。
- ・タブレットにプリントの答えを入れて、自分で答え合わせができるようにした。



3 成果と課題

(1) 成果

- ①休み時間など、小テスト前に学習している様子が見られ、学習意欲の向上につながった。
- ②授業やワーク以外で、取り組める課題が増えた。自分で時間を見つけて取り組むことができる。
- ③映像で見せることができるので、イメージがしやすい。
自分たちでタブレットを用いて復習を進めることができるので、自分のペースで確認ができる。
タブレットに答えを入れることにより、ペーパーレスで答えの確認ができる。

(2) 課題

- ①小テストの結果から、理解度の把握や学習状況の様子を見ることはできるが、その後につながる支援をすることが難しかった。ときプリの取組や個別の支援で対応していきたい。
- ②プリントの取組状況として、得意な生徒が積極的に取り組んでいるが、苦手な生徒があまり取り組めていない状況がある。個別にプリントを渡し、取組の様子を見届けてあげることが必要であると感じた。
- ③教員の準備やICTの利用をもっとスムーズにやっていきたい。また、タブレットの利用が答え合わせや復習など、受け身な部分が大きいので、生徒が自主的に取り組むことのできる課題の工夫が必要である。

【保健体育科】

Ⅰ 教科テーマ

「ポイントや個人課題の視覚化を図り、ねらいや目標を意識できる授業づくり」

「生徒の学びをすすめる教育活動の推進～見える化・発信を意識した取組 ～2～」を受け、保健体育科では上記テーマを設定した。毎回のねらいやポイントをホワイトボードに示すことで、「この 1 時間は何について学んでいるのか」を意識して取組ができる考えた。また、生徒の技能課題をビブスの色で分けることで課題の見える化を図ることで、外的に課題が見えチームメイトや仲間、教員からも課題に応じた効率のよい声かけをすることができると考えた。見える化を図ることで仲間へのアドバイスやチームミーティングにより生徒の発信する力（表現する力）も育成できると考えた。

2 具体的な取組

①授業のねらいやポイントを掲示する。

- ・毎時間のねらいをホワイトボードに掲示し、導入からまとめまで意識できるようにした。
- ・ポイントを掲示したことで生徒が視覚的に理解できるようにした。

②課題別でビブスやグループ分けをする。

- ・個人の課題別にビブスを着用することで、まず自分の課題を見つめ直す機会とした。
- ・ビブスの色を分けることで生徒の課題を視覚化し、アドバイスをしやすくした。

③授業時のICTの活用

- ・タブレットに見本やルール解説の動画を載せた。
- ・タブレットでお互いの動きを撮影し、アドバイスの資料とした。
- ・Googleクラスルームでリーダーや種目のクラスをつくり、情報共有した。

3 成果と課題

(1) 成果

- ①ねらいを常に生徒が意識した取り組みや会話が多く見られた。
- ②振り返りカードにねらいに沿った反省や次時の課題を書き込む生徒が増えた。
- ③課題に応じた具体的なアドバイスを生徒同士でする姿が多く見られた。
- ④自らの動きを動画で見ることで技の習得がスムーズであった。

(2) 課題

- ①毎時間のねらいを書き足していくことで、単元の流れは一目で見やすかった。しかし、ホワイトボードのスペースを使ってしまったので、ねらいを学習カード最初から打ち込んでおく。

- ②学習カードの内容で課題を発見したりまとめたりできる生徒が少しずつ増えたが、発達段階からすると割合が低いので、学習カードの内容や資料提示の精査をし、全員が取り組めるようにする。
- ③授業中における生徒の会話（話し合い）が少ないので、知識を思考に繋げる指導をする。
- ④ICTの準備から使用までをもっとスムーズに行う。

まとめ

「生徒の学びをすすめる教育活動の推進～見える化・発信を意識した取組 ～2～」を通して、運動に関わる二極化（運動する子としない子）が運動時における思考力に影響が出ているのではないかと感じた。初めて行う動きや練習をする際に、様々な遊びや運動をしている子は、自ら考えながら取り組んでいるように感じる。逆に経験の少ない子は、思考が停止している場面が多く見られた。この思考する力と取りかかるまでの時間差を埋める手立てが必要である。実際「わからない所がわからない」状態の生徒が「運動って楽しい！面白い！」と感じるまでには時間がかかる。なぜなら「理解＝できる」でないからである。

今後の保健体育の授業では、生徒の「できた」を体験させてあげられるようにしていきたい。その取り組みの積み重ねが一人でも多くの運動好きの生徒を育てることに繋げていきたい。

【防災教育】

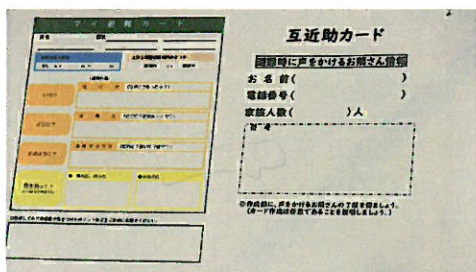
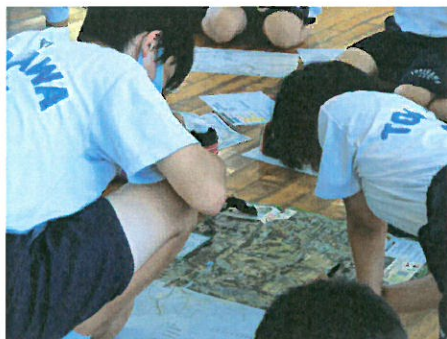
(1) 学校研究主題を受けた防災教育のテーマ
「生徒自らが防災における課題を見つけ、考え、周囲に発信する力を養う防災教育の推進」

(2) 具体的な取組

① 防災袋の用意



② 「防災マップ」づくり、「互近助」カードの作成



③ 指定避難所（本校体育館）宿泊体験と家庭との連携（中止）
8月27日に第2学年を対象に指定避難所である本校体育館への宿泊体験を計画した。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、急遽中止せざるを得なかった。生徒だけでなく、協力依頼をしていたおやじの会の方々にも落胆が大きく、残念であった。

④ 避難所開設時における支援業務の体験、炊き出し訓練

イ 避難所受付



ロ 携帯トイレ設置



ハ プライベートルーム組立



ニ 段ボールベッド組立



ホ 避難教室の設置



ヘ 通信及び発電機体験



- ⑤ 医療従事者への感謝の手紙(予定)
生徒会の生徒を中心にコロナ渦の最前線に対応されている医療従事者の方へ感謝の手紙を書き、送る予定である。

(3) 成果と課題

① 成果

イ 防災意識の涵養

防災袋を準備することにより、非常時への備えができた。また、町のハザードマップをもとに自宅から学校までの「防災マップ」を作成することで、災害リスクのある場所を詳細に確認することが出来た。

ロ 生徒の自助力、共助力の育成

避難所宿泊体験を通じて避難所が開設となったときに、①避難所受付、②携帯トイレ設置と使用、③プライベートルームの組立、④段ボールベッドの組立、⑤避難教室の設置等、⑥災害本部との通信及び発電機体験を生徒自身が支援する側となって協力できる体制を構築できた。更に、全校生徒が避難時における「互近助カード」を作成し、近所の高齢世帯や身体の不自由な方へ声をかけられる体制を整えることができた。これは地域とも連携できる「発信力」にもつながり、とても大きな成果である。

また、防災訓練を体験したことで、生徒会を中心に医療従事者への感謝のメッセージを送りたいという意識が生徒に生まれ、発信力は更に高まった。

ハ 行政との連携強化及び保護者との連携

町の総務課と連携してハザードマップや避難所開設時の支援物資や防災備品の使用体験を行った。防災宿泊体験では担当者と一緒に宿泊して貰い、非常時における課題などを直接確認して貰う予定である。さらに PTA「おやじの会」には炊き出し訓練での支援や避難所開設時における物資運搬を協力して貰え、連携を強化することが出来た。



「おやじの会」

② 課題

イ 防災マップの見直し

自然災害は必ず起こるものである。つまり、いつ、どのように発生するか予測が付かない。また、道路や建物は毎年改良工事などで変化するため、常に危険箇所を確認し、安全な避難場所を確認する必要がある。

ロ 地域との連携

昨年度に引き続き行政(ときがわ町)や保護者(おやじの会)との連携ができたが、実際の避難時には地域とも連携しなければならない。今後も行政機関(ときがわ町総務課、ときがわ町教育委員会)と確認しながら、地域とどのように連携していくのか考えていく必要がある。

ハ 避難時における交通手段の確保

自宅から避難所までの距離が数キロという生徒は「避難時に高齢者を避難させるためには車が必要である」という感想があった。これについても、行政や地域と連携して進めるとともに、保護者や各家庭に協力をしてもらう必要がある。

ニ 常に緊張感や要性を持たせた防災教育の実施

どんな取組も継続していくためには緊張感や必要性を感じさせなければならない。そこで来年度は、今年度を実施できなかった「大災害に遭遇された経験を被災された方から直接伺う機会」を設けたい。